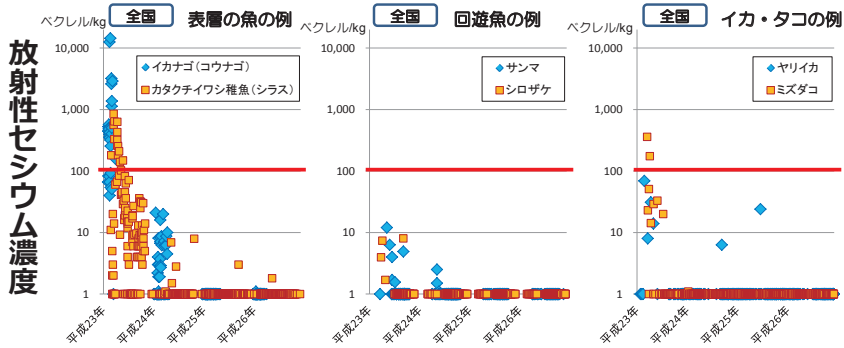


- シラス等の表層魚：時間の経過とともに基準値を下回る
  - 回遊魚、イカ・タコ、エビ・カニ、海藻類：基準値を下回る
  - カレイ等の底魚：現在でも基準値を上回る魚種が存在する
- 生息域の環境や食性等が品目毎の傾向に関係



(注) 平成23年3月24日～平成27年1月31日までの検査結果を水産庁にて集計。

農林水産省「農林水産現場における対応」より作成

農林水産省

生息域の環境や食性の異なる魚種の放射性セシウム濃度の検査結果を紹介します。コウナゴやシラスなどの海面近くに生息している魚は、事故直後には高い値がみられましたが、現在ではすべてが基準値以下となっています。

サンマ、シロザケなど海を広く回遊する魚は、事故直後であっても100ベクレル/kgを超えるものはなく、50ベクレル/kgの値もみられません。

一方、一部のカレイ類などの海底近くに生息する魚の中には、現在でも一部の海域で基準値を上回る検体が検出される魚種が存在しますが、その頻度はかなり低下しています。

また、イカ・タコ類などの水産無せきつ動物は、事故直後は高い値がみられましたが、表層の魚より速やかに濃度が低下し、現在では50ベクレル/kg超の値もみられていません。これは、水産無せきつ動物では塩類が海水と体の中を自由に行き来するため、海水中の放射性セシウム濃度が低下すると、速やかに体内の濃度も低下するためと考えられます。

このように、生息域の環境や食性等が品目毎の放射性セシウム濃度の傾向に関係することがこれまでの調査結果から示されています。

河川等に生息する内水面の魚種の放射性セシウム濃度は、区域によっては基準値を超えています。養殖のものは、全て基準値以下となっています。

本資料への収録日：2013年3月31日

改訂日：2014年3月31日

：2015年3月31日

本情報は事故当時（2011年）～2014年度の情報です。

関連 Q&A

・4章 QA3

農林水産物の安全性を確保するためにどのような取組がとられているのですか